

研究生生活を振り返って

商学部教授 石田重森

私の研究分野は、保険、年金、社会保障と広範にわたるが、その端緒は大学で数学科に入り、統計・確率論からゲームの理論とやや経済学に近い分野の勉強をしたことである。そして保険数理の専門家であるアクチュアリーを旨としたが、やはり経済学の本格的な知識の必要性を感じ、改めて大学に入り直して経済学を学び経済理論、経済政策や人口論、不確実性の経済学などを勉強した。さらに大学院に進んで、数学と経済学の知識を活用できる保険学・年金論の研究の道に入った。

丁度その時代、保険による経済的保障の達成が重要視されるようになり、また老後の生活保障に関して、公的あるいは私的な年金について論議され始めた頃で、まだ研究者も少なく、前途に活躍の可能性を感じたからである。

やがて縁あって、東京から福岡大学に赴任するのであるが、恩師・指導教授の庭田範秋先生から、「福岡は酒も肴も旨いが酒はほどほどに、また勉強し過ぎて死んだ学者はいないからスポーツや趣味もほどほどにしないと学者としては大成しない」と教導を受けた。福岡大学に着任して、保険学の泰斗・今村有元学長から、「余計なことに煩わされず、思う存分研究しなさい」と励まされた。両先生の教えは、ある程度守り通したつもりである。

さらに後になって、商学部の先輩・藤本隆士先生から、「学者として、40代で活躍したいなら30代で勉強せよ、50代で活躍するなら40代で頑張れ、60代でも活躍するなら50代で勉強しな



さい」と教示されたことが印象に残っている。

また、指導教授からは、留学と著書と学位が学者にとって必要な3本柱だと教えられ、これらに関して努力を傾注した。

お蔭で、福岡大学の在外研究員としてのロンドン、シティ・ユニバーシティの留学では、イギリスの保険の歴史に関する難解な原典の翻訳に、少人数の仲間と取り組み、成果を挙げた。

ところで、学問としての保険学や年金論は実学とされ、実社会で保険事業・年金制度として行われていて、人々との関わりが深い。学問的には、その根底にある本質論、理論的考察が重要なのであり、経済的観点や数理的観点から考察を進め、分析を行った。

先人が論究した諸学説を検討し、保険・年金の原理や仕組み、機能などを解明し、それが諸外国を含め、現実社会にいかに応用・活用されて提供されているか、などを考究した。

そこから進んで、保険事業・保険経営のあり方、年金制度の課題、さらに保険と金融、リスクマネジメント、年金改革などに及び、現実的

な諸問題を理論的に考察することに努めた。

やがて、わが国の少子・高齢社会が急速に進展する中で、年金、医療、介護、福祉などの社会保障が財政窮迫から危機を迎え、これに対し保険理論をベースに論究することが多くなった。年金制度、医療保険、介護保険などのさまざまな問題につき、著書や種々の雑誌に解説、論評を発表し、政策提言も行った。

こうして研究成果を公表することが、研究者・学者としての責務であり、少しでも社会に貢献できればとの思いで、保険に関して、NHKのクローズアップ現代をはじめ、テレビ、ラジオ、新聞などで自分の意見・主張などを述べてきた。また年金制度に関しては、2階建年金・基礎年金の創設に関連して、衆議院社会労働委員会・地方公聴会での意見陳述や、各地での厚生年金基金に関する講演などの活動を行った。

その後も福岡市社会福祉審議会委員長や、福岡県政府管掌健康保険運営懇談会座長などの社会貢献活動を続けている。これも研究の延長の一環と捉えている。

さらに、こうした研究、意見・見解の公表、社会活動が、福岡大学の学生の教育に役立つことは、文科系の学問からして当然の事であり、研究と教育が一体であるべき大学の一翼を担うものと確信している。

したがって、学者・研究者として、論文や論稿を執筆して発表することが大切な責務であると自覚して、晩年では、原稿を提出して書物・

雑誌などが未刊行のうちに次の論文を書くこと、すなわち常に提出中の原稿がある状態を保つことをモットーとしてきた。

幸いにも、福岡大学には研究生活に適した環境が整っており、若い時期に思う存分、自由な研究を出来たことが、後の研究の広がり、深まり、そして継続に大変役立ったと、大学関係者の皆様に深く感謝する次第である。

研究生活を振り返ると、年金保険、死亡保険などの生命保険から自動車保険、火災保険、海上保険などの損害保険、さらに年金・医療・介護などの社会保険そして社会保障とじつに研究対象が広がった。これらを土台に、生活保障、生涯生活設計、さらにリスクマネジメント、保険デリバティブと多方面に及んだ。

時代の変遷とともに学問も移り変わるが、研究姿勢・研究態度は変わることも少なく、保険学・年金論の発展を次世代に託すのに、本稿が少しでも役立てば幸いである。

最後に、福岡大学での研究・教育の総まとめとしての最終講義では、「知らないと損する保険・年金」について話をさせて頂いたが、多くの教授や事務の方々、それに全国各地から参集してくれたゼミOB、現役の学生諸君など多数のご参加をいただき、盛況のうちに終ることができたことは、この上ない喜びであり、感謝の気持ちで一杯である。



界には無い複雑さがある以上、対象が固体なので固体論も零から勉強しなければならない。しかし、大学の教育・研究生活をスムーズに遂行するには是非とも博士号が必要である。今、もしノーと言って学位が取れるかどうか分らない。悩んだ末、仕方なく引き受けて、清水の舞台から飛び降りる思いで固体論とモード整合法の勉強を零から始めた。

電磁界の問題には無い難しい多くの問題に突き当たりながら、どの学会にも出席せず、教授と二人三脚でひたすら勉強を続けた。さすがに教授も責任を感じてか、一生懸命指導して頂いた。それぞれの努力と熱意が通じたのか、零からスタートして1年半で弾性場の境界値問題にも電磁界で成功しているモード整合法が適用できることに見通しがつき、その解の収束性も証明された。早速、その算法を具体的に各種の3次元弾性波導波路の伝搬特性の解明のために適用した。この計算には電算機に大きな容量と長い計算時間を要したが、幸いなことに、その頃、九大通信工学科が情報工学科に改組されたのを機に、学科に専用の大型計算機が設置された。昼間は使用者が多くてとてもその計算が捗らないので、誰も居ない夜中に一人で専用して計算を実行したので、意外と早くいろいろな導波路の特性解析も終了した。取りあえず、学位論文に必要な範囲で論文としてまとめ、1年半の間に国内外の主要学会の論文誌に合計4編発表することが出来た。それらをまとめて、学位論文として提出し、昭和53年2月九大より工学博士の学位が授与された。零からスタートして3年の早さでまとまった。その後、昭和54年までに国内外の論文誌に4編の論文を公表できた。

以上、弾性波導波路へのモード整合法の適用も成功し、国内外でも認知されたことを機会に、次の課題として、「モード整合法による光導波路の解析」に取り掛かることになった。この分野でも研究は軌道に乗り、目途もついてきたの

で、昭和54年9月から1年間カリフォルニア大学バークレー校に福岡大学在外研究員として家族5人で出張した。その時の成果の一つとして、IC実験のためのクリーンルームが福岡大学で設置され、九州におけるIC教育、研究に友景教授と共に先鞭をとることができ、シリコンアイランド九州の面目を保った。帰国後、昭和63年にかけてモード整合法による各種光導波路の解析に関する論文を国内外の学会論文誌、国際学会発表など含めて10編程公表した。以上のモード整合法による弾性波導波路、光導波路の数値解析結果は、国内外においてそれぞれの算法の精度の検討に引用されている。

ところで、昭和63年から突然教務部長(8年間)、続いて副学長(4年間)になり、その間多くの入試改革、教育改革、各種大学運営制度改革、11の新学科・研究科新専攻の増設などに没頭する必要に迫られ、研究活動は完全にストップせざるを得なかった。12年後、役職を終えたときは既に61歳となり、学会でも浦島太郎的存在であることを自覚させられた。このとき、九大時代の研究室の同僚(九大教授)に「フーリエ級数展開法」によって光導波路の解析をしてはと勧められ、百田助手と二人で取り組んだ。成果は平成19年までに国際学会発表10編、学会論文誌4編、外国ジャーナル2編、福大工学集報6編にまとめられている。

思えばヨチヨチ歩きの田舎者がエリート集団の九大で7年、福大で38年の合計45年の長い間大学での研究、教育、役職生活をまがりなりにも無事務めてこれた事は多くの師、友人、大学関係者の方々の温かい御支援、御鞭撻の賜物であり、心より感謝して大学生活を終えたいと思います。

最後になりましたが、これまでの研究に対して研究推進部からの御支援を長い間賜りましたことも申し添え謝意を表します。